

# 『枕草子』二月つごもりごろに」の教材化について

松 島 毅

一

本稿では、『枕草子』二月つごもりごろに」の段の、高等学校における古典教材化をめぐる問題についての考察を行う。「二月つごもりごろに」の段は、清少納言の漢学の素養を示す、いわゆる自讃談のひとつであるが、その教養を示す相手が当代随一の教養人として知られた藤原公任であることも手伝ってか、管見に入る限りでも、かなり多くの教科書に教材として採用されているようである。<sup>1)</sup>したがって、当章段を実際に授業の場でもとりあげる場合、当然、公任と清少納言との歌句の付け合いにおける機知の応酬や、その背後にある両者の漢学の素養、といった話題が中心的な位置を占めるわけだが、私は、この「中心的位置を占める話題」の中にこそ、この章段を授業の場で扱ううえでの最も困難な問題があると考えている。以下、そのことについて論じると共に、当章段を授業の場で扱うにあたっての指針を提示してみたい。

二

まず、以下に教科書所載の当章段本文を掲げよう。<sup>3)</sup>  
二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてあるを見れば、懐紙に、

少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきにいとようあひたるを、これが本はいかでかつくべからむと、思ひわづらひぬ。「たれたれか。」と問へば、「それそれ。」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでかことなしびに言ひいでむと心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして大殿籠りたり。主殿司は、「とく、とく。」と言ふ。げに、おそうさへあらむは、いととりどころなれば、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きてとらせて、いかに思ふらむと、  
わびし。

これがことを聞かばやと思ふに、もしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ、内侍に奏してなさむ。』となむ、定め給ひし。」とばかりぞ、左兵衛督の、中将におはせし、語り給ひし。

傍線を付した部分は、いうまでもなく、『白氏文集』巻十四「南秦雪」を、公任と清少納言が和歌に翻案したとされる部分である。これは、公任が最初に下句を出し、清少納言がこれに上句をつけて答えた、という体裁となっている。この部分について、教科書・教師用指導書は注を付し、公任が清少納言に送った下句「少し春ある心地こそすれ」が、「南秦雪」の第四句「二月山寒うして少しく春有り」を踏まえ、清少納言が付けた上句「空寒み花にまがへて散る雪に」が、第三句「三時雲冷かにして多く雪を飛ばし」を踏まえたものと説明している。この説明は、一見、何の矛盾もないものであるように思われるが、実は、この説明には、非常に大きな問題点がはらまれていると思われる。まず、第一に、当章段が踏まえたときされる「南秦雪」の訓詁が本当に正確なものであるのか、という疑問。筆者の勤務校で使用する教科書・教師用指導書の注には、第五句までの訓詁を示しているが、本来、「南秦雪」は、七言律詩であり、後半の三句が省略されているので、念のため、全文が掲載された『新釈漢文大系』より本文・書き下し文を引用しておこう（ただし、必要上、前半四句の訓

詠は、教科書・教師用指導書のものを生かしてある。

往歳曾爲二西邑吏一  
往歳曾爲西邑の吏となり、

價下從二略口一到中南秦上  
略口より南秦に到るに價る。

三時雲冷多飛レ雪  
三時雲冷かにして多く雪を飛ばし、

二月山寒少有レ春  
二月山寒うして少しく春有り。

我思二舊事一猶惆悵  
我は舊事を思つて猶ほ惆悵す、

君作二初行一定苦辛  
君は初行を作して定めて苦辛せん。

仍頼愁猿慣不レ叫  
仍ほ頼に愁猿寒うして叫ばず、

若聞二猿叫一更愁レ人

若し猿の叫ぶを聞かば更に人を愁へしめん。

この「南秦雪」は、白居易が任地に赴く（恐らく左遷であろう）友人に對して、その友人にとつて見知らぬ土地での苦勞を思ひやつたものと思われる。この七言律詩が、その第三・四句で表現しているのは、その友人の任地であり、白居易もかつて通つたことのある南秦の土地に對する感想である。したがつて、ここは、その南秦の地が、農耕の時期（春・夏・秋の「三時」）にも氣候が寒冷で、二月という春たけなわの頃の頃でも山は寒く、本當に春と呼ぶことのできる期間は短い、あるいは、春らしい時期があることが少ないといっていることになるのであろう（ちなみに、この「友人」とは、やはり詩人として有名な元稹であり、白居易の「南秦雪」は、実はこの元稹に唱和したものである。その元稹作「南秦雪」第二句には、「駱谷春深未有春」とあり、白居易の「少しく春有り」を解釈するための参考になるだろう）。したがつて、白居易の「南秦雪」を訓詁するに当たつては、その

意味するところと日本語の感覚とに鑑みるに、教科書・教師用指導書の訓読は、正確ではない可能性があるように思われる。第四句は、『新釈漢文大系』が読んでいるように、「二月山寒うして春有ること少なし」と訓読すべきなのではなからうか。少なくとも、訓読上は「少しく春有り」とするとしても、意味的には「春が短い」「春らしい時期があることが少ない」の意で解釈されなければならぬ。「春が少しある」だとか、「すこし春めいていゝ」の意味ではないのである。

そこで、第二の問題が発生する。「南秦雪」第四句を「春有ること少なし」と訓読するのが正しいとすると、公任がしたことは、単に「南秦雪」の一句をとったというだけにとどまらず、大幅に「南秦雪」を読み変えているということにならう。ただし、平安時代には、教科書や諸注釈書のように「少しく春有り」と訓読していた可能性も否定できない。なぜなら、当時の漢詩文享受は、主に朗詠によるものであり、そこでは、発声したときに美しい響きをもつとされる部分、例えば七言律詩の頷聯(第三・四句)——「二月つごもりごろに」は、「南秦雪」のこの部分を利用してゐる。頸聯(第五・六句)などの対句の部分が好まれていた。また、その場合、漢詩文の内容自体は、あまり問題にされなかつたという実態があるようだからである。したがって、平安時代当時、この「南秦雪」を朗詠するにあたり、「春有ること少なし」よりも「少しく春有り」の方が美的基準にかなう読み方とされ、その訓読法によって人々に知られていた可能性は残る。しかしながら、公任から清少納言に対して「少し春ある心地こそす

れ」というした句を贈られたとき、清少納言は、確かに「今日のけしき」を想起している。「今日のけしき」とは、いうまでもなく「二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたる」様子なのであり、それに加えて「南秦雪」の第三・四句の内容を合わせ思い描くのでなければ、「今日のけしき」にようあひたるを」とはいえなかつたはずである。したがって、平安時代の漢詩文享受のありかたが先述のようであらうとも、この章段においては、「南秦雪」の意味内容を無視する訳にはいかない。いずれにしても、「南秦雪」を原拠と想定する限り、公任が清少納言によりみかけた段階における「少し春ある心地こそすれ」は、指導書や多くの注釈書のように、「ほんの少々春がある心地がする」と解釈することはできないと思われる。春の気配は、否定的にとらえられなければならないのである。

さらに、ここで第三の問題が生じる。清少納言が公任に対して答えた上句「空寒み花にまがへて散る雪に」をどう理解するのかわかるといふ問題である。従来の説明では、「空寒み」と「散る雪」によって、「南秦雪」の第三句「三時雲冷かにして多く雪を飛ばし」をふまえ、公任の下句が「南秦雪」を利用したものであることに気づいたことをほめかしたものとされている。しかし、それでは、「花にまがへて」の部分は、どのように理解すればよいのだろうか。実は、公任・清少納言が付け合わせた歌句の内容は、原詩の内容との間に大きなズレを生じているのである。試みに、二人が詠んだ句を付け合わせて和歌の形にしてみよう。

空寒み花にまがへて散る雪に少し春ある心地こそすれ

この歌の解釈はどうなるであろうか。雪を「降る」ではなく、「散る」と表現するのは、いうまでもなく、伝統的な「見立て」の技法によっているからだ。「降る」雪を、「散る」花と錯誤したことが歌われているのである。つまり、この歌の主眼は、雪が降り寒い時候であるにもかかわらず、その寒さの象徴であるはずの雪を、花の散る姿とあえて重ねること、春の気分を見いだしていく、ということになる。すると、語句こそ「南秦雪」を踏まえているようではあるが、公任と清少納言との応答は、内容的には全く原詩とは関連を持ち得ないものとなってしまう。少なくとも、清少納言は、公任がよこした下句を「少し春がある心地がある」という意味で受けとっていることは確実であろう。

しかし、そうとばかりは断言できない要素もある。既に述べたように、清少納言は、公任からの下句を見たとき、「げに今日のけしきにいとようあひたるを」といっている。しかし、この日の天候からして、「少し春ある心地」がするとは思われないはずであろう。だから、公任のよこした下句がこの日の様子にびつたりだったと彼女が思ったとすれば、それは、間違いなく、「南秦雪」の内容を想起しているとしか考えようがない。ところが、彼女が実際に詠んだ句は先述のごとくなのである。

ここまで三つの問題点を提示してきたが、この三つの問題点は、それぞれ独立したのではなく、連動して起こるものであることは理解されよう。これらのことを、我々はどう理解すればよいのだろうか。

このことについての私見を示せば、次のようである。既に述べ

たごとく、公任が送ってきた下句について、「げに今日のけしきにいとようあひたるを」といっていることから考えて、清少納言が最初に下句を見た時点では、「少し春がある心地がする」という意味で理解していないことは確実である。そして、その理解は、字面を素直に読んだだけでは到達できる体のものではないから、やはり、その背後に「南秦雪」を想定する必要があるだろう。では、彼女が実際に詠んだ上句はどうなるか。「南秦雪」を念頭においていることが確実であるなら、清少納言は、それを踏まえた上で、『古今和歌集』以来の伝統的な「見立て」の技法を持ち込むことにより、公任の下句までも読み変えて、雪を花と錯誤することによって、逆説的に春を見いだしていくという内容の和歌として構成し直したということになる。公任の側でも同様である。当日の天候から考えて、彼が「少し春があるような気持ちがある」というつもりで「少し春ある心地こそすれ」と清少納言に詠みかけたとは思えない。萩谷朴氏がいうように、「春有ること少なし」を意識的に詠み変えたが、あるいは、当時の訓読（あるいは朗詠）が「少しく春有り」だったのであって、それをそのまま使ったかのどちらかなのであろう。いずれにしても、この「二月つごもりごろに」における公任と清少納言との歌句のやりとりには、二重三重の「南秦雪」読み変えが見られるのであって、互いが「南秦雪」の詩句をめぐっての謎かけと〈ズレ〉を樂しむという、極めて高度で複雑な漢詩文撰取のありかたを示していると思われるのである。したがって、従来の教科書・教師用指導書のこの点に関する説明は、短絡的であり、不十分なもので

あるといわざるを得ない。公任が「南秦雪」の詩句を利用したということだけはわかるが、今のままの説明では、なぜ公任が「南秦雪」によらねばならなかったかを明らかにできないばかりか、なぜ清少納言が「内侍に奏してなまむ」と称賛されたかすら、理解することは困難なのではないだろうか。

### 三

さて、ここまで述べてきた読解上の問題点を踏まえたうえで、次には、実際に授業の場でこの「二月つごもりごろに」の章段を扱う際の問題について考えることにしよう。まず、この章段を教室で読む場合、最も困難な問題の一つは、生徒に藤原公任という人物についての知識が大きく不足していることである。

「二月つごもりごろに」の段は、最初に述べたように、清少納言の自讃談としての側面を持つが、それと同時に当代一の教養人公任と清少納言との交流を語る章段としての、あるいは、清少納言の漢籍の知識の深さを語る章段としての側面をも持っている。しかし、この章段の、そのような多様な側面は、実は、公任その人の存在によって保証されている部分が大い。藤原公任という人物あってこそ（もちろん、他の殿上人達の存在も無視してはいけませんが）、清少納言は、歌句をつけるにあたって緊張し、ためらうのであり、返事を出した後では不安になったり、好評だったと聞いている喜ぶのである。彼女の豊かな漢籍の知識も、この章段では、公任という存在によって支えられているといえよう。従って、この章段を学習・読解するに当たっては、藤原公任がどのよ

うな人物であったかを絶対に知っていなければならぬ。

だが、残念なことに、学習者（高校生）の藤原公任に対する知識は、極めて乏しいといわざるを得ない。私が授業した中で察し得た限りでは、藤原公任という人物をこの「二月つごもりごろに」を読んで初めて知ったという生徒が大半を占めていたように思う。むしろ、生徒にとっては、清少納言こそ、『枕草子』の作者としてあまりにも有名であるという点で、比較的身近な存在なのであり、肝心の公任は、その清少納言に難題をもたらす人物の一人としてしか映らない部分があるようである。ただ、生徒にとっては、清少納言といえは、明るく、活発で、勝ち気な女性像を思い描く傾向が一般的にあるので、この章段に見られるような、公任を前にしてただならぬ緊張を強いられた、ある意味ではおもしろささえ感じさせる清少納言のありかたは、生徒には若干意外で新鮮な印象を与えるらしい。従って、生徒の側でも、藤原公任という人物に対しては、ある種の違和感——「あ、公任というのは、ちよつと違ふのかな」という印象は持っている。そこで、教師としては当然、三船の才のような、公任にまつわるエピソードを持ち出して、公任がいかに卓越した教養人であったかを説明しようとするわけであるが、生徒にとっては、違和感を感じつつ、また、そうした説明によって理屈では一応の理解は見せる（「へえー、そんなものなのかなあー」という感じ）ものの、実感としての公任像というものをつかみ切れない部分が残るようなのである。その意味で、「二月つごもりごろに」は、生徒にとって決して取り組みやすい教材ではないといえる。

さらに、実際にこの章段を読み始めると、前節で述べたような「スレ」のある両者のやりとりがこれに拍車をかける。「これは、本当に『南秦雪』を上手に翻案したことになるのだろうか」という疑問が起こってくるのである。私は、先程、この章段における公任と清少納言とのやりとりを、「極めて高度で複雑な」ものであったと述べたが、この「極めて高度で複雑な」やりとりが、古典学習のほんの入り口に立つたばかりの高校生にとって「極めて高度」と思えず、「複雑な」とだけしか感じられなくても無理のないことであろう。では、「二月つごもりごろに」は、高校の古典教材として全く不適當なものなのだろうか。教材としての可能性は、どこにも見いだせないのだろうか。結論を先に言わせてもらえば、私は、そのようには考えていない。むしろ、扱い方によっては、従来の古典教育の最も足りない部分を十分に補い得る可能性をこの「二月つごもりごろに」は持っている、と考える。節を改めて、そのことについて述べよう。

#### 四

さて、「二月つごもりごろに」は、現在のところ、多くは「古典Ⅰ」において教材化されている例が目立つ。いうまでもなく、「古典Ⅰ」は、必修「国語Ⅰ」を引き継ぐ科目であり、「古典Ⅱ」や「古典講読」に引き継がれていくべき中間的存在としての性格を持っているものでもある。では、そのような「古典Ⅰ」という科目は、高等学校における国語科古典教育の中で、どのような役割を担うべきものであるのだろうか。まず、必修科目である「国

語Ⅰ」において古典を扱う場合、学習者は、全くの初心者であるわけだから、当然古典を読むための基礎となるべき文法や単語の学習に時間を大きく割くことになるはずである。そして、最終学年で扱うことになるであろう「古典Ⅱ」・「古典講読」では、できれば古典の表現を味わい、鑑賞するというレベルまで達したい。だとすれば、その中間的存在としてある「古典Ⅰ」は、できるかぎり多様な作品に触れつつ、古典への理解を深めるものでありたいはずである。また、その際は、時間の都合や学習者の到達度にも配慮すれば、それぞれの作品をまとまった分量でとりあげることはできないわけであるから、これも当然ながら、作品のごく一部でありつつ作品全体の特質を最もよくとらえた（少なくともそう思われる）箇所を教材として選ぶべきであろう。

そのような観点から『枕草子』「二月つごもりごろに」の段を「古典Ⅰ」の教材として見ると、どうであろうか。漢籍の知識を背景とした機知の応酬、そして自讃へと至るこの章段の展開は、確かに『枕草子』のある特質を最もよく表現しているといえそうである。しかし、この点があまりに高度・複雑に過ぎ、最低限の文法・単語学習を終えたばかりの学習者には適さないのではないかと、ということは既に述べた。また、藤原公任という当代随一の教養人が相手とはいえ、返事するにあたって緊張し、不安にさいなまれる清少納言の姿は、『枕草子』の中では、やや異質なものだといえよう。あるいはそれは、私の『枕草子』・清少納言に対する偏見だといわれるかもしれないが、少なくとも、「二月つごもりごろに」に表れた清少納言像が、『枕草子』全体を通して描

かれた清少納言像を代表し得るものとはいえないであらう。その点では、生徒が学習以前からなんとなく抱いている「明るく、活発で、勝ち気な」清少納言像のほうが、より本質に近いといわねばならない。したがって、思うに、「二月つごもりごろに」の段は、『枕草子』という〈作品〉を代表して読むべき教材としてよりは、平安時代の貴族の生活（特に文芸生活）を読むべき教材として適しているのではないだろうか。もっといえば、作品そのものを読むというより、平安時代当時の人間のありかたを読むという観点でとらえるべき章段なのではないかと思うのである。

このような観点に思い至るとき、注目されるのは、角川書店『古典Ⅱ』における単元設定のありかたである。ここでは、「人が織りなす歴史」という単元のもとに、菅原道真・藤原道長それぞれのエピソードがとりあげられている。これは、事実上は、『大鏡』講述の単元であるのだが、巻序にさほど拘泥することなく、〈人物〉という軸を設け、その軸に従って個々のエピソードを集める。このようなありかたは、実在の人物に関する教材を扱ううえで極めて示唆的である。もし、このようなありかたが可能であるならば、『古典Ⅱ』あたりで、これをさらに拡充させた形で新たな単元を設け、この「二月つごもりごろに」を扱うことがより効果的になるのではないかと思うのである。具体的には、『古典Ⅰ』において『枕草子』を学習した後、『古典Ⅱ』において「歴史上の人物と古典（仮称）」といったような単元を設け、平安時代の大文人でありながら高校生にとってなじみの薄い藤原公任に関する教材文（例えば、ここで話題にしてきた『枕草子』「二月

つごもりごろに」の他に、『紫式部日記』『大鏡』『公任集』『和漢朗詠集』などが考えられる）を集め、その中の一編として「二月つごもりごろに」を講述するのはどうか。教材として、次のような可能性が考えられよう。

①学習者は、例えば、清少納言と紫式部が同時代人だと知っていても、文学史の知識は断片的になりがちである。藤原公任という焦点を設定し、それに清少納言、紫式部、藤原道長らをかからませることで有機的な連関性を持った文学史の知識を与えることができる。あるいは、「南秦雪」をさらにクローズアップすることによって、日本人の中国文化受容のありかたについても考えるきっかけになり得よう。

②『古典Ⅱ』は、基本的に三年次配当の科目であるが、現在の高校教育がおかれている状況に鑑みて、いわゆる受験校・大学付属系属校・職業校の如何を問わず、最終学年では十分な授業時間を確保することは難しい。従って、古典の授業にあたっては、古文・漢文をばらばらに学習するよりは、できれば一括して扱うことのできる教材が望ましい。このような単元設定によって、「二月つごもりごろに」・『和漢朗詠集』で漢文を取り上げることができる。

以上、『枕草子』「二月つごもりごろに」について読解上の問題点を指摘するとともに、その教材としての可能性について論じてきた。「二月つごもりごろに」は、既に述べたように、注釈的な面での問題は多いが、扱い方によっては、今まで国語教育の場で評価されていた以上に、さまざまな可能性を持つ教材である考

えられる。特に、公任と清少納言との応酬は、平安時代の漢詩文撰取のありかたを最もよく示したものであると同時に、その中で清少納言が見せるためらいや不安は、はるか千年前の人間を、今まさに眼前にしているかのとき臨場感を読者に充分味わわせてくれるだけの力を持っているし、さらにそこから進んで、王朝サロンのあるかたや宮廷女房とは何かといった問題も投げかけてくるだろう。『枕草子』「二月つごもりごろに」の教材としての力は、その意味で決して軽いものではないと判断される。

注(1) 角川書店「古典Ⅰ」・右文書院「古典Ⅰ」・古典講読・旺文社「古典

Ⅰ」・第一学習社「古典Ⅰ(古文編)」・教育出版「古典Ⅰ」など。

(2) 例えば、私が勤務校で教材として使用した第一学習社「古典Ⅰ(古文編)」は、この章段に関わる「企指導目標」として、「主として人間の実生活における価値評価・教養などについて清少納言の特色を理解させる」・「脚注に引用される和歌、中国文学の出典辞句についても、本文とのかかわりに注意して理解を深めるようにする。」と記している。

(3) 第一学習社「古典Ⅰ(古文編)」によった。この本文は、『新日本古典文学大系』のそれを基本としているが、『校本枕草子』によって改めた部分がある。

(4) 花房光樹『白居易研究』(世界思想社、一九七一年)所載の本文によった。  
(5) 金沢文庫本・神田本などは、巻十四に欠き、訓読法を確認できなかった。

(6) 新潮日本古典集成『和漢朗詠集』解説

(7) 萩谷朴『枕草子解環』『新潮日本古典集成』がこの説をとる。

(8) 『大鏡』(頼忠伝)にこのエピソードがある。なお、教育出版「古典Ⅰ」

においては、「貴族の世界」という単元を設け、その中で、「二月つごもりごろに」と「三船の才」を扱い、関連を持たせようとしている。

(9) 注(1)参照。

〔付言〕

本稿は、一九九六年一月二十日、早稲田大学国語教育学会例会における口頭発表に加筆・修正を施したものである。口頭発表は、早稲田実業学校高等部において、共に「古典Ⅰ(古文)」を担当する海老原雅人教諭並びに福家俊幸・土佐秀里講師より、数々の助言を受けて成ったものである。また、発表の場においても出席者各位より貴重な意見を頂戴した。ここに記して皆様に感謝申し上げます。

(早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程在学・早稲田実業学校講師)